妄点（試し読み）

大文妄

文妄
bun-mow

目　次

大深度地下女子高生祭り　やおいやおい　……5
メテオドライブ・ロストライト　ぺたへるつ　……9
Do Not Trust　えむばーど　……13
おさななじみの終息　菱野隆弘　……17
冷たさ　フミコフミオ　……19
秋の風を受けて　やおいやおい　……21
おさかな　えむばーど　……23

大深度地下女子高生祭り

やおいやおい

地上を闊歩する女子高生は、すべてエイリアンだった。

ヒーロー特撮かエイプリルフールのウソのような研究論文が発表された。街で見かける女子高生（エイリアン）は、みな人類に擬態したエイリアンで、男性から性的にエネルギーを奪う。そして蓄えたエネルギーで地下に卵を産み付けるのだ。

三〇年前、僕がまだ大学生の頃だ。学食で、ケータイ片手に食事をしていた。生中継された首相の緊急記者会見に釘付けになった。気付けばかけ蕎麦はすっかり伸び、ショックと緊張から味がしなかった。どうやら確からしい。確信した僕は、一年生の身ながら研究室のドアを叩いた。

女子高生（エイリアン）の卵は、モホロビチッチ不連続面よりも内側、マントルの中を蠢く。数百年周期でマントルから浮上し、岩盤に卵を産みつける。卵はマントル周辺のウラン鉱を糧に成長し、やがて孵化する。そして孵化するとき、時として小規模な核分裂を起こすのだ。匹敵する強烈なエネルギーを放出され、地震となる。地震の原因は女子高生（エイリアン）だった。

太平洋プレート・ユーラシア大陸プレートの狭間は、よい産卵場だった。論文の仮説通り、多数の卵が発見された。その中の一つ、東京の地下一〇〇キロに存在するとされた卵は、通常の卵の数倍のサイズであることが判明した。孵化を許せば、日本は滅びる。日本だけではない。世界中で大規模災害を引き起こしかねないサイズの女子高生（エイリアン）の卵が発見された。

すぐさま国家を挙げた卵破壊プロジェクトが発足した。地下へ地下へと一〇〇キロ、岩盤を削り、核融合爆弾で卵を爆破する。時間との戦いだった。当時の掘削機では間に合わない。掘削機に幾年もの日々が費やされた。いざこれ以上の速度が望めなくなったとき、それでも全速力で走らせてもってして、孵化する直前に爆弾を届けられるか、掘削機の運転は、地質を見極める人の勘に頼ることになる。

のみならず、放射能汚染を防ぐためには、爆弾を届け次第、爆発前に穴を埋める必要があった。縦穴を掘り進めつつ、端々に爆薬を仕掛けるには、人の制御が欠かせ

ず、作業員を救う必要がある。そうして、地底まで巨大掘削機で掘り進み、ロケットで地表にとんぼ返りする。途方も無いプランが採択された。

超巨大掘削機、通称「プラットフォーム」は、直径三〇〇メートルの核融合炉を有する。無尽蔵なエネルギーで、地下へ地下へと掘り進める直径五〇〇メートルのドリルを回す。掘削機全体で高さ三〇階建て相当。掘削した土でシールドを構築しながら地下へ潜っていく。宇宙船並みの各種プラントを備え、自給自足を可能にする。そして、核融合炉は、そのまま核融合爆弾を兼ねている。

選抜に選抜を重ねられたスタッフが乗り込んだ。指令員、作業員、そして科学者。数年にわたって狭い世界で寝食を共にする。僕が最初にプラットフォームに乗り込んだのは、二十年前。計画は失敗、僕らは地表に戻った。地表に留まる悔しさが、科学者としての僕を再び地下へと進ませた。それが五年前のことだ。

（続く）

メテオドライブ・ロストライト

ぺたへるつ

遠い昔の話だ。
俺は、星になりたかった。空に煌めく、一つの星。願いを乗せて、夢の頂を目指す流れ星。
でも――
今は、ただの石ころ。
土に塗れて地に転がる、有象無象の小石に過ぎない。
遙か頭上に輝く流れ星どもを羨んでも、あの頃にはもどれはしない。
戻れたとしても、きっと一瞬も煌めけずに地に落ちる。
そんなことはわかっている。
星とは、夢と希望で輝くものだ。
夢も希望も、今は何処にもありはしない。そんなものは、とっくの昔に見失ってしまった。
全ては、闇の中。
俺は、自分の姿さえ覚束ない暗黒を彷徨い、足掻いてきた。
でも――
暗闇の先でこの手が掴むことができたものは、たった一枚の紙切れだった。
最後の辞令だと上司は言った。
不意に渡された解雇通知書は、眩しいほど白く、鳥の羽より軽かった。
別に、勤めていた会社に未練はなかった。仕事も、好きだったわけじゃない。解雇は唐突だったけれど、とりたててショックを感じていなかった。そんな自分に驚いた。まあ、どこかで覚悟していたのかも知れないし、あるいは、これを望んでいたのかも知れない。
明日から出勤しなくてもいい――ただ、その事実に戸惑った。
俺は鎖に繋がれた犬だった。暗闇の中で、鎖に引かれるがままに生きてきた。だから、その鎖を外さてしまったら、どこへ行けば良いのか解らなかった。そんな自分に、思わず苦笑してしまった。
右も左も、前も後ろも暗闇だ。見上げれば星が瞬いているが、そこへと辿り着く術はとっくの昔になくしている。
とにかく、どこか、暗闇を紛らわす場所が欲しかった。

「災難でしたね」
そうして逃げ込むように入った居酒屋には、人の良さそうな主人がいた。
「どこも不景気ですから。うちも、いつまで続けられるか」
路地裏の奥にぽつんと灯りを点けた、小さな店だった。狭い店内には、俺以外の客は数えるほどもいない。カウンター越しに、俺は愚痴を吐き出した。
主人は静かに、時に相づちを打ちつつ話を聞き、合間に酒を注いでくれた。酒の銘柄はよくわからなかった。そんなに強くない代わりに、柑橘類の酸味とミントの風味が利いた印象的な酒だった。主人のオリジナルだったのかもしれない。
愚痴は、とめどなく溢れてきた。
会社のこと、社会のこと、世界のこと、自分のこと、生活のこと、過去のこと。一つ吐き出す度に目の前の暗闇が煌いた気がした。でも、一瞬だけ。すぐに、なお暗い闇に戻る。だから、俺は話し続けた。そうしないと、不安に押し潰されてしまいそうだった。
俺の中から出てくる言葉は、不満だけだった。そして、どんなに不満を吐き出しても、他には何も出てこなかった。
俺には何もなかった。
堆積しヘドロのようになった不満の底には、虚無だけがあった。
「俺は、どうすりゃいいんだろう……？」
無意識に、そんな言葉が出た。
「やりたいことを、なさればいい」
主人の言葉にハッとする。
「あなたがやりたいことを、すればいいんですよ」
髭を蓄えた穏やかな口元が微笑む。
でも、だけど――
「やりたいこと、か」
それが、わからなかった。
「何かあるんじゃありませんか？」
問われて、愕然とする。
本当に、なにも出てこなかった。
答えを求めて、視線が宙を泳ぐ。そこに何があるわけ

でもないのに。と、カウンターの隅に小型の受情器（インフォニタ）が置かれていることに気づいた。映像だけが映し出されている。他の客に配慮してか、音はない。映し出されているのは、メテオドライブのニュースだった。

空を飛び交う色とりどりの光の軌跡が映った後、一人の少女がクローズアップされる。少女は泣いているようだった。彼女はその細い両腕で、大きなトロフィーを抱えている。

テロップが流れる。

『快挙！　星都正杯（セントラル・リーグ）で最年少の飛光士（ルーク）が優勝！』

胸の縄で締め付けられた気がした。

「おや、あなたもメテオドライブが好きなのですか？」

主人は嬉しそうに言う。

「私もね、大ファンなんですよ。特に彼女のね」

画面の中では、少女が必死にインタビューに答えているようだった。音声はないので、何を言っているのかはわからない。

「なんでも、亡くなったお兄さんの夢を叶えるために飛光士になったそうですよ。それが、まだ飛び始めて一年で優勝！　すごいですよね。彼女は天才だ。それに、夢に向かってひたむきな姿は、見ていて励まされますね」

俺は何も言えなかった。

曖昧に微笑むだけだった。

メテオドライブ――画面の向こうの、煌めく世界。頂を目指す者達が、星となって輝く世界。

そこはかつて、俺が憧れ、目指し、挑み、そして……諦めた世界だった。

（続く）

Do Not Trust

ᔕᕈᕼᕮᖇᕮᕦ

サーバールームは、完全な密室だった。湿度は５０％に保たれ、オペレーション用の端末からは外部ネットワークへの到達性はなかった。監視カメラはデータ流出への対策基準を満たしており、そのシステムの操作中の映像は、情報流出対策として、すべて完全消去済みであった。

「驚くほどまともな職場じゃないか。こんなところで事件性などあるはずもないだろう。自殺じゃなけりゃ、勤務時間を誤魔化して、勝手なサービス残業をしようとしたなれの果てだよ。第一世代のヤツらは本当に自分勝手だからな」

警察ＯＢからの復帰組の野本は、第二世代の例に漏れず、第一世代を疎ましく思っている節がある。普段から捜査に口を挟もうとするが、今回はやたらとしつこかった。事件性なぞかけらも無いのだから、捜査委託会社に投げて自殺として片付けて貰っておけ、と。

「だから静かにしていただきたいと言っているのですが」捜査一課の松井は語気を強くして言う。「自殺の理由も見当たりませんし、サービス残業も厳しく監視されています。もし過労死ラインを超えていたら、即座にマイナンバー・セントラルから通報がゆき、行政が動いているはずです。それに、今回の現場は私の持ちです」

何かと口を挟もうとする野本を追い出し、松井はため息をつく。つくづく、第二世代の下に居るとやりづらい。たとえ、この世の持ち主が第二世代だとしても、もう少し静かにしてくれていたらと思うことは多い。

松井は首を振る。仕事に集中しよう。

ルーム内は密室状況であった。外から操作しないと開けられない入り口が二つ。その中に一つ死体。常識的に考えれば、サービス残業による過労死か自殺か、どちらにせよ事件性など微塵もない。勤務状況については、直近三ヶ月では朝八時から夜二十二時まで。十四時間勤務という、ごくごく標準的な勤務状況。松井は顎を撫でた。

かつて、サーバールームという密室の中で死体が見つかることは、そう珍しくなかった。発狂したエンジニアが自らの命を絶つ事象が多発したのだ。

その点、データセンターであれば、日本を代表するコン

グロマリットが運用し、そうそう事件（インシデント）は起きない。あったとしても、サーバーたちの排気が集まるホットアイルでの作業中、あまりの暑さに服を脱ぎ捨てて素っ裸になり、監視カメラが捉えた映像を、寸刻も間を置かずにインターネットの大海原に面白動画としてアップロードされる程度だ。

（続く）

おさななじみの終息

菱野隆弘

おさななじみが、今日自殺する。
それを僕は三年前から知っていた。

二十三歳の僕は朝家を出て、同い年のおさななじみと共に道を歩く。僕は出勤のため、おさななじみは通学のため、駅に向かう。小学校の頃からのこの儀式は、途中思春期という厄介な過程により中断されはしたものの、この年になると周りの目も気にならなくなり、未だに続いている。同年代のスーツ姿の男と私服の女性が歩いているのは、知り合いの多い昔から住んでいるこの町だからこそ温かい目で見られるけれど、都会に出たらなかなか奇異に思われるのではないだろうか。

「今日化粧濃くない？」いつもよりごってりしているおさななじみの顔を見て、僕は尋ねる。

「今日はねー、ほら、ゼミのあとデートだから」

「まだ付き合ってたんだ。演劇部の人だっけ」わりかしかっこいい人だった気がする。

「情報が古いね。今はサークルの人」

「いつの間に……」

「一週間ぐらい前に乗り換えた」

「聞いてない」

「言ってないから」ぷいと横を向くおさななじみの顔を見ながら、相変わらずとっかえひっかえだな、と思う。とっかえひっかえ。その割に、彼女の手は僕の方には向かないのだけれど。それでもいい、と僕は思う。『おさななじみ』という立ち位置がきっと一番心地いいだろうから。

その立ち位置も、今日失う。

（続く）

冷たさ

フミコフミオ

怪人「レッドマン」が近所の公園のベンチに座っているのを見つけたときに吹きすさんでいた秋風の冷たさを三十年経った今でも俺は完璧に覚えている。

当時小学生だった俺は、全身をテカテカした赤い布で覆った「レッドマン」の異様な出で立ちより、錆び付いた公園のベンチに座っている奴の哀愁が気になって仕方なかった。風の冷たさも奴の哀愁に拍車をかけていた。レッドマンは話題の中心だった。「返り血を浴びた殺人鬼」「宇宙人」「怪人」「赤い彗星のシャア」といったトンデモから、「キチガイ」「変態」「無職の暇つぶし」といった現実的なものまで、奴の正体についてのくだらない憶測が池に浮いてくる泡のように浮かんできては、次の日には弾け飛んでいた。

（続く）

秋の風を受けて

やおいやおい

泰雄は秋の訪れを予感した。地元はまだ、夏の茹だる暑さが残り、季節最後の蝉が鳴いていた。地元を出てから数時間、泰雄は一人無言で運転を続けていた。気付けば都内を目前とした高地のサービス・エリアだった。車を降りると、ドアの僅かな隙間から吹き込む風が冷たかった。泰雄は学生時代、運動嫌いだった。だが、体育のあとの冷たい空気だけは好きだった。

「もうすぐ、十月か」

泰雄は、誰にともなく、つぶやいた。風が首筋を抜けていく。泰雄ははじめて自分がずっと休憩を取らずにいたことに気付いた。都内に就職して早三年目、はじめての帰省であったことにも。泰雄はほんの少し、疲れを感じた。

「ここのところ、仕事づくめだったもんな」

缶コーヒーを飲みながら泰雄は高校時代を思い出していた。毎朝の通学路、駅前商店街の惣菜屋が、サービス・エリアの屋台が重なった。卒業式以来、疎遠になった親友二人の姿が擦れ違ったカップルに重なった。ふいに、もう卒業した街に気持ちが引き戻される。

かつての級友たちが今どうしているのだろうか、とふと思いを馳せた。十年経った今、顔を思い出せる級友は、数えるほどしかいない。卒業アルバムに並んだ顔をみても、何人も思い出せないだろう。泰雄は、その卒業アルバムの表紙すら思い出せなかった。卒業アルバムには、担任からのメッセージも、級友からの寄せ書きも何も書かれていない。泰雄は、それを望んだように過ごしていた。

（続く）

おさかな

えむばーど

電車を降りると、むわりと湿度の高い空気が僕を取り囲んだ。夏が終わり、秋と呼ばれる時期だというのに、ひどく蒸し暑い。季節を感じさせるのは、カレンダーの数字くらいだった。

駅を出て、目的地へと向かう。どうやら、繁華街からは少しはずれたところにあるらしい。しばらく歩くと、静かな並びにぽつん、と一軒暖簾がかかったお店があった。近づいてみると古風な和風建築で、丁寧に手入れされていることがわかる。田舎の、祖母の家に重なる。店名を確認すると、ここが待ち合わせの場所だった。

暖簾をくぐり戸を引くと、香ばしいにおいが鼻をくすぐった。店の中は、中央の調理場を囲むように年季の入った木製の机が配され、その中で店主らしき人物が、串物を焼いている。ぱちぱちと炭の弾ける音と白熱電球の柔らかい光が、店の中に満ちている。僕は、中に入ったとほとんど同時に、この店のことを気に入っていた。

店内を見渡すと、永井が、僕に向かって手を振っているのを見つけた。

「よぉ、とりあえず何か呑もうぜ」

永井が東京に来てから三年ほど、月に一回定例のように酒を飲み交わしている。お互い、高校時代から変わらずの大人げなさを確認しあい、そろそろ身を固めろよと言葉を投げ合うのだ。

「お前が、こんな隠れ家的な店を知っているだなんてな」僕が言うと、

「いつも教えて貰ってばかりだったからな。たまには反撃しないと」とニヤリ不敵に笑う。

僕は苦笑いで応え、塩鯖とさっぱりとした日本酒を頼む。永井は、その様子を意外そうに見た。

「変わったなぁ」

「何が？」

「いや、お前が魚を頼んだこと」

永井はお猪口を手に取り、くっと飲み干した。

（続く）

妄 点 vol.9

発行日	2015 年 11 月 23 日　第一刷発行
頒　価	50 円
編　集	大文妄
発行所	太陽村第二収容所
公式サイト	http://www.bunmow.net
連絡先	bunmow@hogefuga.net